

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720009

研究課題名(和文) 若きセラーズの思想形成過程の解明

研究課題名(英文) The philosophy of young Sellars

研究代表者

三谷 尚澄(MITANI, Naozumi)

信州大学・人文学部・准教授

研究者番号：60549377

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：研究代表者は、10年を単位とする長期的目標として、20世紀米国の哲学者、ウィルフリッド・セラーズの哲学体系をその詳細にわたって明らかにする研究に取り組んでいる。本研究において、研究代表者は、これまでの研究成果を発展的に継承し、若きセラーズの思想形成に影響を与えた哲学者たちとの相互関係に焦点をあてることによって、「セラーズ哲学の全貌をその詳細にわたって解明する」という計画を一步先へと進めることを試みた。より具体的には、セラーズによる倫理的直観主義、批判的実在論、進化的自然主義の受容と継承のあり様を明らかにする、という成果を達成した。

研究成果の概要(英文)：In this research, I focused on the philosophy of a 20th century American philosopher, Wilfrid Sellars. My approach to Sellars is characterized by its placing emphasis on the intellectual relationship that Sellars had with his contemporary thinkers. To be more specific, I considered how such philosophical strands as ethical intuitionism, evolutionary naturalism, and critical realism had influence on the formation of Sellars's philosophy.

研究分野：西洋哲学

キーワード：ウィルフリッド・セラーズ 認識論 存在論 倫理的直観主義

1. 研究開始当初の背景

(1) 英米圏を中心に、セラーズの哲学への注目はかつてないほどに高まりつつある。セラーズの全体像をバランスよくおさめた論文集(In the Space of Reasons [2007])、主著「経験論と心の哲学 Empiricism and the Philosophy of Mind」[1956]への詳細なコメントリ(deVries & Triplett, Knowledge, Mind, and the Given [2000])、その全体像をめぐる優れた水準での総括的研究(W. deVries, Wilfrid Sellars [2005], J. O'shea, Wilfrid Sellars, [2007])など、本格的・体系的なセラーズ研究にとりかかるためのアプローチ・ルートは着実に整備されつつある。

(2) このようなセラーズ哲学の復権を後押ししている事情として、現代の英米圏において最も盛んに議論されている驚くほど多様な問題の思想史的源泉として、セラーズの強力な哲学的体系が位置している、という点を挙げておくことができる。具体的には、

ピッツバーグ大学におけるセラーズの後継者たちが展開する斬新な「志向性」の理論(Robert BrandomとJohn McDowell)、

「経験論と心の哲学」における「ジョンズの神話」を原型とする「心の『理論』理論('Theory' theory of mind)」と「心のシミュレーション説」の対立、

David Chalmersを代表に、最新の認知科学が提供する知見と伝統的なデカルト主義の発想を両立させることを試みる「自然主義的二元論 Naturalistic Dualism」の台頭

「心の哲学」における「反表象主義」(Richard Rorty)、

「消去的唯物論」(Paul Churchland)、

「機能主義」(William Lycan)、

「道具主義」(Daniel Dennett)、

の主張など、現代英米哲学において最も中心的な論争の場所となっているきわめて多様な問題の源泉にセラーズの哲学が位置しているのである。

(3) しかし、あるセラーズ研究者が指摘する通り、上記 ~ の現代哲学における主要な諸立場のあいだには、「セラーズが知的祖先であることを除いては、実質的な意見の一致をまったく見出すことができない」(Garfield [1989])ほどの隔たりがあるように思われる。

(4) そして、この事実から、研究代表者の考える研究計画の必要性が逆説的に強調される。すなわち、「これほど多様な哲学的立場がみなセラーズの影響下に成立していることは分かった。しかし、本当のセラーズは一体どのようなことを主張しているのか」という問いに明確な回答を与える必要性が強調される。

(5) 以上のような状況を背景として、研究代表者は、以下のような研究を継続的に実施してきた。

セラーズのテキストを内面的かつ体系的に解釈し、セラーズその人をしてセラーズの思想を語らせる研究。

ブランドムとマクダウエルという二人の代表的後継者とセラーズとの「距離」を過不足なく計測することで、「本来のセラーズ」の立ち位置を三角測量的に浮かびあがらせる研究。

(*平成 19~20 年度、同 21~22 年度のそれぞれについて科学研究費補助金の援助を受けた。)

2. 研究の目的

(1) 上述の背景をもとに、研究代表者は、20世紀アメリカにおける最も重要な哲学者の一人、ウィルフリッド・セラーズの哲学について、その全体像を詳細に渡って明らかにする研究を、10年を単位とする長期的計画のもとに推進している。そして、本研究は、これまでに遂行されてきた研究の成果を発展的に継承しつつ、このより大きな長期的計画の一環として、次のような目標の達成を目指すものである。

1910~1930年代のアメリカで大きな影響力をもった「批判的実在論 Critical Realism」の哲学(Roy Wood Sellars, A. O. Lovejoy等)について、その概要を明確にした上でセラーズ哲学への影響を明らかにする。

同時期のアメリカで誕生し、現在に至るまで大きな影響を残し続けている「進化的自然主義 Evolutionary Naturalism」(ロイ・ウッド・セラーズの用語である)について、その概要を明確にした上でセラーズ哲学への影響を明らかにする。

1920~1940年代のアメリカで大きな影響力を誇ったC. I. Lewisの「概念的プラグマティズム conceptual pragmatism」とその継承者たち(Roderick Chisholm, Roderick Firth)の哲学について、その概要を明らかにした上でセラーズ哲学との関係を明確にする。

セラーズの哲学体系の形成において、「倫理的直観主義」の発想が、どのような仕方ですべて受容されているのか、また、その発想が、「所与の神話の解体」等、彼の哲学体系の根本をなす主張とどのように関係しているのかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 「批判的実在論」、「倫理的直観主義」、「進化的自然主義」、「ルイス的基礎づけ主義」に関する主要な公刊著作を網羅的に収集する。

(2) 収集された一次資料をもとに、セラーズ哲学の形成に大きな影響を与えた哲学者たちの主張を明快に整理した資料を作成する。

(3) セラーズ自身のテキストとの関係を明らかにする論文構想を作成し、研究会・学会等で発表を行った上で、理解の不十分な点、解釈的に誤っていると思われる点に関するフィードバックを求める。

(4) 論文もしくは将来的な単著の元となる原稿を作成し、最終的な研究成果の公表を行う。

4. 研究成果

以下、年度別に分けて研究成果を記載する。

(1) 2011 年度

【研究成果の概要】

「若きセラーズの思想形成過程の解明」という目標を達成する一環として、とくに次の諸点について明らかにした。

C.I.ルイス派の代表的哲学者であるロデリック・ファースとセラーズの論争をテーマとした論文を作成し、発表した。論争の主題となるのは、セラーズにおける「感覚印象」の取り扱いである。とくに、前期を代表する著作である「経験論と心の哲学」における「新規の導入」という観点からの感覚印象論と、「カテゴリーの置き換え」という観点から理解される後期感覚印象論のあり方について、ファースとの対決というテーマを軸としながら両者の移行関係を明らかにするべく検討を行った。

セラーズ哲学の方向性を根本的なところで決定づけたカント哲学との関係について、おもにセラーズにおける「知覚」理論の構造という観点から明らかにした。とくに、カントにおける「超越論哲学」の構想が、セラーズの知覚論においては「超越論的言語論」という独自の枠組みのもとに継承されていることを明らかにした。

初期から後期にわたり、セラーズ哲学の主要な関心であり続けた「倫理的直観主義」の問題について、それがセラーズ哲学においてどのような仕方で理解されているかを明らかにする研究を実施した。考察の軸となったのは、アリストテレス、オッカム、デカルト、イギリス経験論、パース、シュリック(論理実証主義)などとの歴史的影響関係と、その延長線上に構想された「規則に従うこと」をめぐるセラーズ独自の哲学的考察の二点である。

【自己評価】

2011 年度の研究目的は、「C.I.ルイス派基礎づけ主義との対決をめぐる研究」を推進することであった。これらの点については、「所与」、「表象」、「感覚印象」といったセラーズ哲学の重要概念を、ルイスの後継者であるファースの理論との対決の現場に焦点を合わせた研究を遂行することで、十分な成果を達成することができたと考えている。ただし、公開された研究成果において言及されているのは、おもにファースの哲学のみであり、ルイス本人や同じく重要なルイス派哲学者であるロデリック・チザムとセラーズの知的交流・対決の諸相については、研究成果を論文等の完成された形で公表することができなかった。この点で、次年度以降に引き継ぐべき課題が残されたと言わざるをえない。

(2) 2012 年度

【研究成果の概要】

「若きセラーズの思想形成過程の解明」という目標を達成する一環として、引き続き次の諸点について明らかにした。

セラーズの提示する「倫理的直観主義」のあり方について、それを彼の認識論における「非推論的報告」の構造をめぐる分析の延長線上に位置づけ、その詳細を解明する論文を発表した。

関西倫理学会において開催されたシンポジウム「直観と倫理」の記録に基づいて、イギリス道徳哲学、倫理的直観主義に対するフッサール現象学からのアプローチとの対質を背景としつつ、セラーズにおける倫理的直観主義の現代的意義を検討する共同討議の要録を発表した。

ロバート・ブランダムによるリチャード・ローティ批判を取り上げ、「人間の活動の規範的次元」をめぐるセラーズ派哲学者たちの議論がカントの決定的影響のもとに構築されていることを明らかにする発表を行った。

【自己評価】

「若きセラーズの思想形成過程」という大テーマのもとで、「倫理的直観主義の研究」を推進することが本年度の目標であった。また、この目標は、「セラーズによる 20 世紀初頭オックスフォード哲学の受容」に焦点を合わせた研究を行うことをその大きなサブテーマとして含むものであった。

以上の観点からするとき、「セラーズにおける倫理的直観主義のあり方」と、「倫理的直観主義という文脈におけるセラーズ哲学の意義」を明らかにする研究を発表したことで、今年度の研究目標は十分に達成されたと判断することができる。

また、オックスフォード時代のセラーズの知的成長をふりかえるとき、そこで決定的な役割を演じたのはプリチャードとプライスを通じたカント哲学へのとりくみであったと考えることができる。この点について、本年度の研究は、「規範性をめぐるセラーズの理解にカントが与えた決定的な影響」を明らかにする成果を含んでおり、この観点からも当初の目標は順調に達成されたものと考えることができる。

(3) 2013 年度

【研究成果の概要】

ウィルフリッド・セラーズと、父親であるロイ・ウッドセラーズの知的影響関係について、以下の諸点を明らかにした。

セラーズがロイ・ウッドの哲学を中心に論じている論文、「The Double-Knowledge Approach to the Mind-Body Problem」を取り上げ、その内容を明らかにした。より具体的には、以下の通りである。

当該論文において、セラーズは、アメリカにおける實在論的哲学の復権について語

っている。

「カント哲学の発展的継承者としてのセラーズ」という通常のセラーズ理解からすれば、この発言は驚くべきものであるが、「カント主義者としてのセラーズ」という暗黙の前提を外してセラーズの哲学体系を眺めるとき、「アメリカにおける実在論」という観点からセラーズの哲学を解釈しなおすことによって、従来のセラーズ解釈が見落としてきたある死角の存在が明らかになる。

すなわち、アメリカにおける実在論の流れの中に位置づけられた仕方セラーズの哲学を眺めるとき、セラーズ哲学の中心的主張は、「所与の神話」を解体するだけでなく、神話が解体されたあとに残る「論争の余地のない所与性」を求めるプログラムとして解釈されうるのである。

以上のようにして、ロイ・ウッドからウィルフリッドへつながるアメリカ実在論の系譜に注目することで、従来の解釈的傾向が見逃してきたセラーズ哲学のある重要な側面を明らかにすることができた。

【自己評価】

「批判的実在論の哲学」がセラーズに与えた知的影響のあり方を明らかにする研究を行うことが本年度の目的であった。この点について、ロイ・ウッド・セラーズによる「認知的所与」の分析に焦点をあわせつつ、ウィルフリッド・セラーズの哲学が、アメリカにおける批判的実在論の系譜の正統な継承者としての側面を色濃く有することを明らかにすることができた。この意味で、2013年度の研究については十分な成果を達成することができたと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

Naozumi Mitani, Locating the Space of Reasons: what it is like to be a good Sellarsian?, *Shinshu Studies in Humanities*, 査読あり, Vol. 1, 2014, 29-49

三谷尚澄, 人類学と形而上学のあいだで社会プラグマティズムとセラーズ派哲学者たちのカント、*日本カント研究*, 査読あり(依頼論文) 第14号、2013、58-73

三谷尚澄, 倫理的直観はいかなる意味で実在をとらえているのか セラーズ的視点から、*倫理学研究*, 査読あり(依頼論文) 第42号、2012、25-35

三谷尚澄, 経験論の再生と二つの超越論哲学-セラーズとマクダウエルによるカント的直観の受容/変奏をめぐって、*哲学論叢*, 査読あり(依頼論文) 第38号、2011、45-60

三谷尚澄, 「感覚印象」をめぐるセラーズの理解は変化したのか?、*アルケー*, 査読

あり、第19号、2011、191-203

〔学会発表〕(計4件)

三谷尚澄, 「所与」概念をめぐるカント/セラーズ派の分析、*仏教認識論と比較思想の可能性*(招待講演) 2014年3月6日、筑波大学

Naozumi Mitani, On Sellarsian Realism, XXIII World Congress of Philosophy, 2013年8月7日, University of Athens, Greece

三谷尚澄, 人類学と形而上学のあいだで社会プラグマティズムとセラーズ派哲学者たちのカント、*日本カント協会*(招待講演) 2012年11月10日、関西学院大学

三谷尚澄, 倫理的直観はいかなる意味で実在をとらえているのか セラーズ的視点から、*関西倫理学会*(招待講演) 2011年10月30日、関西大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

三谷 尚澄(MITANI, Naozumi)

信州大学・人文学部・准教授

研究者番号: 60549377

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号: